

# 君が目の恋しきからに

——萬葉以前の用言を受けるカラニについて——

吉野政治

1

君が目の恋<sup>こほ</sup>しきからに「軻羅儺」泊<sup>は</sup>てて居てかくや恋ひむも君が目を欲<sup>ほ</sup>り

(齊明紀歌謡一三三)

『日本書紀』齊明天皇条の七年七月二十四日、女帝は朝倉宮に崩御。八月一日、その遺骸は皇太子中大兄とともに磐瀬宮に移り、十月七日、海路、難波へと向かった。「是に、皇太子、一所に泊<sup>くわ</sup>てて、天皇を哀慕<sup>しの</sup>ひたてまつりたまふ。乃ち、口号<sup>くわごう</sup>して曰く」として、掲げられているものが右の歌である。

この歌には、記紀歌謡では唯一の例である原因を示すカラニが見られる。萬葉集より前のものとしては、仁徳天皇即位前紀に「有海人耶、因<sup>ゆ</sup>己物以泣」(あまなれや、おのがものからねなく)という諺があり、この原因を示す「因」もカラと訓まれてはいる。しかし、

君が目の恋しきからに

この訓みは古いものを伝えるものではあるが、平安時代以降のものであり、とりあえずは参考にとどめておくしかない。これはまた、<sup>①</sup>体言に付くものであり、カラニの形でもないことにおいても、齊明紀歌謡の例とは一応区別しておく必要がある。したがって、齊明紀歌謡の例は、用言に付いて原因を示すカラニとしては、最初の例であり、この語の語誌を考える上で、重要なものといえる。

ところが、この例のカラニは、原因・理由を示すものとする説<sup>②</sup>、単なる原因・理由を示すものではなく、原因の軽い点を強調する感情表出に主眼をおく語であつて、バカリ・バツカリ・ダケなどで訳されるのが適当なものとする説<sup>③</sup>が現在では対立している(かつては、<sup>④</sup>逆接のナガラ・ニモカカハラズの意に取られていたこともあるが、現在では採られていないようである)。そこで、いずれの説が妥当かを自分なりに定めておきたいというのが、本稿を草する目

的である。

## 2

一文の意味は、それを構成する語句の意味の積み重ねによって定まるものだが、未詳の語の意味は、一文全体の構成や前後の語句の意味用法から推し量るしかない。このカラニの意味として、時代の降る萬葉集などの例から帰納されたものをそのまま適用しないで、白紙の状態で考えようとすれば、同様の方法を取るしかない。

この歌の構成を理解しようとする場合、まず押さえておかなければならないのは、第一・二句の「君が目の恋しきからに」と結句の「君が目を欲り」とが、言葉は変えてはいるが、同じ意味であるということであろう。

土橋寛氏（『古代歌謡全注釈古事記編』三九三―三九四頁）は、古代歌謡の構成原理を

- 1 一首の歌は前句と後句から構成されている。
- 2 前句では「場所＋景物」という形で景物を提示し、後句でこれを人事的に説明する。
- 3 前句と後句は、繰返しによって統一・連繋され、その形式には脚韻式繰返し、尻取式繰返し、頭韻式繰返しの三つがある。

にまとめられているが、このうちの「脚韻式繰返し」形式のもつとも典型的な例は次のようなものである。

## ① 朝霜の御木のさ小橋

侍臣まつまへい渡らすも御木のさ小橋

（紀二四）

## ② 大和辺に行くは誰が夫

こもりづの下よ延へつ行くは誰が夫

（記五六）

これらは第二句で完全に終止するものである。さらに土橋氏は「古代歌謡は一面では右の構成原理に基づく対立様式のままさまざまな形式を展開させながら、他面では対立様式から統一様式への変化をも見せ始めている」と説明されているが、次のような、第三句へ続いていく勢いを持つ例が、その極初期のものとして位置づけられるものであろう。

## ③ 多遲比野に寝むと知りせば

防壁かきも持ちて来ましもの寝むと知りせば

（記七五）

## ④ 愛しとさ寝しと寝てば

刈薦かりの乱れば乱れさ寝しと寝てば

（記八〇）

まったくの同一語句の繰返しではないことでは異なるが、問題とする「君が目の」の歌は、この例③④のような例と同じものと見ることができるといえる。

「脚韻式繰返し」形式のもので、後句で新たに付加されたことが

らは、繰り返されたことさらに対して、同じ意味関係に立つものであることは言うまでもない。

多遅比野に寝むと知りせば

寝むと知りせば

防壁の持ちて来ましも

愛しと寝し寝せば

さ寝し寝せば

刈薦の乱れば乱れ

「君が目の」の歌においても、第三・四句で新たに付加された内容は繰り返された内容に対して同じ意味関係にたつものである。

君が目の恋しきからに

君が目を欲り

泊てて居てかくや恋ひむも

この点を押さえないと、次の訳のように分かりにくいものとなる。

ただあなたの目の恋しいば<sup>イ</sup>っかりに<sup>ロ</sup>ここに舟泊りして

て、これ程恋しさに耐えないのも、あなたの目を、一目見たいばかりなのです。  
(古典文学大系日本書紀)

この訳では、二つの因果関係があることになる。イはロの原因であり、ニはハの原因である。つまり、この訳の論理関係を追うと、

イの原因でロしていて、ハなのも、ニが原因なのです。

となるが、イとニとは同じことであるから、論が循環してしまうの

君が目の恋しきからに

である。

3

繰り返されたことから第一・二句の「君が目の恋しきからに」と結句の「君が目を欲り」とは、「泊てて居てかくや恋ひむも」のどの部分に係っていくのであろうか。後述のごとく、石垣謙二氏（助詞）からの通時的考察、「助詞の歴史的研究」所収）は「泊てて居て」にかかるものとする。前掲の古典文学大系日本書紀の訳も同様に解しているようである。しかし、「かくや恋ひむも」の「む」の働きを考えると、「かくや恋ひむも」にかかると思われるべきものようである。

助動詞「む」は、未実現・未確定ながらに付いて、こうではないかと推量する場合に用いられる。はっきりしていることながら「む」が付くことがあるが、それは確かなことから不確かなこととして表現する修辞法、婉曲表現である。

ところで、次のような使われ方をしている「む」がある。

A 夢にだに見えむと吾れはほどけどもあひし思はねばうべ見えざらむ  
(萬4・七七二)

「む」の付いている「見えず」という事態は、はっきりしており、疑われるようなものではない。しかし、婉曲表現とも考えられない。

「見えず」という事態が起きた原因を「あひし思はず」（あなたがわたしのことを思ってくれない）ということではないかと推量しているようにも考えられるが、原因をこうではないかと推量する場合は、次のように、原因となることがらそのものに付くはずである。

B 間なく恋ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆる

（萬4・六二二）

この場合、イという事態の原因として、「む」の付いた口のことからが推量されているのであるから、「む」は不確実なものに付いて、こうではないかと推量するという原則をはずれない。

とすれば、Aの歌の「む」が推量しているのは、「あひし思はねば見えず」という因果関係全体と考えるのがよいようである（原因を推量する「む」として、このような例もBの歌の例のようなものと區別されないで説明されているようであるが、以上のような理由から両者を分けた方がよいと考える）。

現前した事態を結果とする因果関係全体を推量するのは、当初考えていた因果関係では説明の付かない事態が現前したからであろう。Aの歌で、当初予想していたものは「夢にだに見えむと吾はほどく」の部分に含まれている。ここには下紐をほどくと相手に逢えるという俗信が踏まえられていると考えられるが、当初はその俗信にすがって、下紐をほどき、その結果として、せめて夢にでもあなた

に逢えるということを期待したのである（「ほどく」の部分に諸説あるが、本稿では以上のように理解する。他の説によっても、ここで想定していることについては成立する）。しかし、結果は予期したものは異なるものであった。そこで、「あなたはわたしを思っはくれていないのだから、夢にさえ見えない」という因果関係を新たに想定するのである。

「君が目の」の歌の「む」も、この因果関係を推量するものと思われる。「かく恋ふ」のは作者自身であるから、「かく恋ふ」こと自体を不確かなこととして推量しているとは考えられない。仮に、そのように扱った場合は、次のように、不自然な訳となってしまう。

君のお姿の恋しさゆえに、舟どまりをして、このように恋い慕いましうか。君にお逢いたしたく思つて。

（武田祐吉『記紀歌謡全講』）

しかし、因果関係を推量するものとしても、前掲の古典文学大系日本書紀などのように、

君が目の恋しきからに

泊てて居て

君が目を欲り

という因果関係を想定してしまうと、他方の「かく恋ふ」事態を含む因果関係を推量する場合、「かく恋ふ」事態を原因と仮定しても、

その結果生じた事態が想定できず、反対に「かく恋ふ」事態を結果と仮定しても、その事態を結果させた原因が想定できなくなってしまう。同本の訳が「これ程恋しさに耐えないのも」と、助動詞「む」を無視したものになっているのは偶然ではないであろう（確かに、現代語訳する場合に生かすことのできない「む」があるが、それは「飾磨川絶えむ日」（萬15・三六〇五）や「思はむ子を法師になしたらむこそ」（枕草子）など、仮想されたことさらに付く場合であり、この歌の「む」のように現前していることさらに付くものではない）。そこで、

君が目の恋しきからに

君が目を欲り

かくや恋ひむも

という因果関係を想定し、これを作者が新たに考えたものとする、当初、考えていた因果関係は、「泊てて居る」ことを原因とし、現前する「かく恋ふ」という事態と反対のものを結果とするものであらうと考えられる。Aの「夢にだに」の例に合わせて、句の順序を変え、当初予想していた結果を補えば次のようになる。

「心慰まむと」泊てて居て 君が目の恋しきからに（君が目を欲り）  
かくや恋ひむも

言い換れば、「イが原因でロする」という因果関係と「ハが原因

君が目の恋しきからに

で二する」という因果関係が対立しているのである。したがって、Aの「夢にだに」の歌の「ども」と同じ位置にある「泊てて居て」の「て」はこの場合、次のような例と同じく、逆接の働きをすることになる。

目には見て手にはとらえぬ月の内のかつらのごとき妹をいかに  
せむ  
（萬4・六三三）

言のみを後も逢はむとねもころに吾れを頼めて逢はざらむかも  
（萬4・七四〇）

花咲きて実は成らねども長き日に思ほゆるかも山吹の花  
（萬10・一八六〇）

土橋寛氏（『古代歌謡全注釈日本書紀編』）は、「泊てて居て」について次のように述べられている。

「泊てて居て」を単に泊まっている意に解しただけでは、歌の心がわからない。同じ所に泊てて居る、（つまりいっしょにいる）意に解してはじめて意味が通じる。つまり離れているわけでもないのに、こんなに恋うことであろうか、というのであって、「恋う」は、単に愛するとか、慕うということではなく、離れて遠くにいる人に対して、いっしょにいたいと願うことである。だから同じ所にいるのに、どうしてこんなに恋しいのだろうか、自らを疑う気持ちを歌っているわけである（実際は

天皇は亡くなってしまつて、いっしょにいるのはその亡骸にすぎないからであるが)。

土橋氏は、これに関連して、前文中の「一所」を「アルトコロとも訓めるが、歌の『泊てて居て』を説明したものと思われるので、ヒトツトコロと訓んで、天皇の喪船と同じ所に碇泊する意に解するほうがよからう」と述べられている(橘守部『稜威言別』もオナジトコロと訓んでいるが、理由は書かれていない。因に、日本書紀に六例見える「一所」は孝徳天皇白雉元年二月条の例のみアルトコロの意の例であるが、他の例は同じ場所・一つの場所の意で用いられており、また、九例ある「一処」はすべて同じ場所の意で使われている)。この土橋氏の説は、「む」の用法から考えられたことと一致しており、さらに「泊てて居て」の解釈において、一歩進んだものであり、従うべきものであろう。

繰り返しの語句を含む短歌の場合、ふたたび繰り返された語句の直前で句切れを持つ場合と持たない場合とがある。たとえば前掲③の「多遅比野に」の歌の場合は句切れがあり、②の「大和辺の」の場合は句切れがない。この「君が目の」の歌の場合、「む」について以上のように考えた場合には句切れを設ける方がよい。したがつて、「も」は詠嘆の終助詞ということになる。句切れを設けないで訳そうとすると、「む」を生かすことができなくなることは、先の

古典文学大系日本書紀の訳で見たとおりである。萬葉集でも、結句に同じく「某の目を欲り」を持つものは、例外なく直前に句切れをもつものであり、一つの慣用的な用いられ方と考えてよいようである。

道遠み来じとは知れるものからにしかそ待つらむ君が目を欲り

(4・七六六)

朝霧の消やすき吾が身ひと国に過ぎかてぬかも親の目を欲り

(5・八八五)

山辺には獵師のねらひかしこけど小杜鹿鳴くなり妻の目を欲り

(10・二二四九)

朽網山夕居る雲の薄れ往なば吾れは恋ひむな君が目を欲り

(11・二六七四)

奥つ波来寄る浜辺をくれくれと独りそ吾が来る妹が目を欲り

(13・三三三七)

夕去ればひぐらし来鳴く生駒山越えてそ吾が来る妹が目を欲り

(15・三五八九)

## 4

「君が目の」の歌の構成や一首を理解するために重要と思われる語の意味用法を以上のように考えた場合、このカラニは、「単なる

原因・理由を示すものではなく、原因の軽い点を強調する感情表出に主眼をおく語であつて、バカリ・バツカリ・ダケなどで訳されるのが適當なもの（石垣氏前掲論文）、あるいは「小さい原因によつて、重い結果をひき起こす場合に使う助詞」（古典文学大系日本書紀頭注）などとする説より、単に原因・理由を示すとする説の方が妥当であるというべきであらう。

石垣謙二氏前掲論文は、このカラニが軽い原因を示すものとした最初のものであるが、その理由を次のように述べられている。

当時は実に外国とのさしせまつた国交上の危局に際してゐたこと、国史のしめすところであり、斉明天皇もこの解決のために西征の途につかれながら事中道に崩御せられたのである。さすれば作者皇太子はこの非常の時、一朝にして国家の最高責任を双肩になはれることとなつたのであつて、たとひいかなる理由があらうとも「泊てて居」ることはゆるされない御地位である。けだし、その結果はただちに「国政をゆるがせにする」となるからである。しかも、その「はててゐ」る原因たるものは、ただ「天皇にお目にかかりたいこと」、それも今は亡き天皇であらせられ、いはば詮ない繰り言にすぎない。かやうに考へる時には、この場合「から」によつてむすばれてゐる原因と結果との間には、まことに霄壤もただならぬ軽重の対照を

見ることができるのである。

この説は「君が目の恋しきからに」が「泊てて居」ることの原因であるとすものであるが、すでにその点において従うことのできないものであるが、もし、このように解釈すると一首を正当に鑑賞できないのではないかと思われる。

古代歌謡の基本的構造から考えると、繰り返された語句が必ずしもその歌の眼目であるとは言えないようであるが、この歌の場合はその感動の中心があるものと見るのが自然であらう。第三者には亡母の姿を乞ふことは「詮ない繰り言」に映らうとも、当事者は遺体を前にしながらも、もう一度蘇り、そのまなざしを自分に向けてほしいと願うのは自然の感情であり、少なくとも、それがその場にふさわしい言挙である。「国家の最高責任を双肩になはれることとなつた」としても（あるいは、だからこそ）、崩御した天皇を「哀慕」（前文）してやまないことを公に歌うのである（日本書紀の「口号」は単に独詠を意味するものではなく、文書による「詔」に對する、口頭による「勅」に相当するものとして使われているのではないかと思われる）。

右のような感情・状況においてこそ、このような歌は成立するのであり、繰り言を繰り言とするかぎり、成立しないのではないかとと思われる。天皇にお目にかかりたい、それダケの原因で船を淹留さ

せていて（いながら）、こんなにも恋い慕うことがあるのか、というのでは、「哀慕」したことはないであらう。

君が目の恋しきからに（君が目を欲り）——恋ふ

という因果関係は、前節最後に引用した萬葉集の例にも窺われる。また、次のような例からも同様の因果関係をたどることができる。

嶋の宮勾の池の放鳥人目に恋ひて池に潜かず（萬2・一七〇）

人の寝るうま寝は寝ずてはしきやし君が目すらを欲りし嘆かふ

（萬11・二三六九）

道の後深つ島山しましくも君が目見ねば苦しかりけり

（萬11・二四二三）

遠山に霞たなびきいや速に妹が目見ねば吾れ恋ひにけり

（萬11・二四二六）

なかなか死なば安けむ君が目を見ず久ならば術なかるべし

（萬17・三九三四）

ぬばたまの夢にはもとなあひ見れど直にあらねば恋やますけり

（萬17・三九八〇）

「某が目の恋し」「某が目を欲り」と「恋ふ」という語にこだわれば、次のような例が近いということになる。

朽網山夕居る雲の薄れ往なば吾れは恋ひむな君が目を欲り

（再掲、萬11・二六七四）

君が目の見まく欲しけく是の二夜千歳のことも吾は恋ふるかも  
（萬11・二三八一）

妹が目を見まく欲り江のさざれ浪しきて恋ひつつありと告げこ

そ  
（萬12・三〇二四）

「君が目の」の歌の中心をなす感情は、このような歌と同一のも  
のということができようが、これらは生きているものの目を欲るの  
が原則である。これが死んだものに対して用いられることについて、  
土橋氏の『古代歌謡全注釈日本書紀編』（三七〇頁）に「目」つま  
り見ることを重視するのは、人と人、人と放ち鳥との間に、それを  
通じて魂の交流が行われるという古代の人々の考え方によるもので、  
人が死んでしまうと、もう見てももらえないということが歎きの焦点  
になるのである」とある。すなわち、「君が目の」の歌は、同じと  
ころで停泊することぐらいいは慰められないほどの「哀慕」の情で  
あることを、疑問表現の形を取りながら、もう一度あなたのまなざ  
しを受けたい、魂の交流を行いたい、という内容で述べたものとい  
うことになる。

ところで、萬葉集に見られる用言を受けるカラニは、助動詞を添  
えたもの・助詞「が」を介するものを含めて、ほとんどすべてが石

垣氏が言われているようなものであることは確かである。二、三その例を示す。

ただ一夜隔てしからに「可良爾」あら玉の月か経ぬると心まど

ひぬ (4・六三八)

故里は遠くもあらず一重山越ゆるがからに「可良爾」思ひぞ吾がせし (6・一〇三八)

初春の初音の今日の玉箒手に取るからに「可良爾」ゆらく玉の緒 (20・四四九三)

ただ、同じ用言であっても、本稿で扱ったものは形容詞を受けるものであり、萬葉集の例はすべて動詞を受けるものである。とすると、形容詞を受けるカラニが萬葉集に見られないということを含めて、萬葉時代とそれより前とで、接続助詞カラニの意味用法に変化があったということになる。したがって、その変化の理由を明らかにするのが、次の課題ということになるが、それはカラの原義、また同じく原因・理由を示す諸形式との相互関係を考えながら進めるべきものようであり、別稿を期すことにする。

## 注

① a 因已物以泣 (前田本日本書紀院政期点)

b 因已物以泣 (寛文九年版日本書紀)

c 因已物

(日本私記甲本彰考館本。ただし、国史大系本日本書紀私記に「オリヌモミカラ 恐当捩藤一本谷本作オノカモノカラ」とある)

② 「大言海」、武田祐吉「記紀歌謡全講」、相磯貞三「記紀歌謡全註解」、土橋寛「古代歌謡全注釈日本書紀編」等。

③ 石垣謙二「助詞「から」の通時的研究」(助詞の歴史的研究所収)、古典文学大系日本書紀、「日本国語大辞典」、「岩波古語辞典」、宇治谷猛「全訳現代語訳日本書紀」等。

④ 橘守部「稷威言別」、飯田武郷「日本書紀通釈」、上田万年・松井簡治「大日本国語辞典」。

## 付言

カラニについての結論、およびそこに至る過程においても土橋先生の説に拠るところが多く、そこからほとんど出てないものになった。したがって、ことさらに稿を成す必要もないのであるが、本文で述べたように、この斉明紀のカラニは、この語の初出例であり、カラニの語誌を考えようとするものにとつては、現在では意見の対立する、この用例の意味を確定しておくことは重要である。また、そのカラニの意味を決定する過程で、土橋説とは異なるものも含まれている一方で、氏の記紀歌謡論を充分理解しているかどうかもおぼつかないので、このような形で提出し、御批判を仰ぐことにした。